

コラム

五稜郭・疎水・本店巡礼

地球環境ユニット 田上貴彦

6月ボンの気候変動枠組条約補助機関会合からの帰り、乗り継ぎのオランダ・スキポール空港に到着する直前、五稜郭、いや、六稜郭が見えた。ナールデンという街のようだ。ちなみに、ドイツのフランクフルトにも旧市街を囲むようにノコギリ型の緑地がある。堡塁跡である。

ちょうどそれと前後して、鈴木博之著『庭師小川治兵衛とその時代』を手にした。前に、東京都北区西ヶ原の旧古河庭園の近くで職住近接を実践していたことがあり、旧古河庭園の洋館はジョサイア・コンドル、日本庭園は小川治兵衛によるものであることは知っていた。この本では、小川治兵衛の庭の背景として琵琶湖疏水工事がとりあげられている。

琵琶湖疎水を設計した内務省技師・田辺朔郎は、幕臣で砲術を収めた孫次郎を父として、維新直後、徳川家によってつくられた沼津兵学校付属小学校で最先端の洋学教育を受けた。その後、工部省の工部大学校に入学し、技術者として明治政府に出仕してゆく。工部大学校の校長は大鳥圭介であり、幕府のテクノクラートで五稜郭の生き残りであった。

疎水起工後3年目に当たる1888年、田辺朔郎は渡米してマサチューセッツ州のローエルとホリヨークの運河視察を行っている。いずれにおいても分流によって水位の異なる水路をつくり出し、高水位の水路（アパー・カナル）から低水位の水路（ローア・カナル）に水を落とし、その落差を利用して水車を回し、工業用動力とするものである。

これを読んで、以前出張で訪れたフィンランドのタンペレ市を思い出した。タンペレは、ヘルシンキ都市圏を除くとフィンランド第2の都市であり、北のネシ湖と南のピュハ湖に挟まれている。ふたつの湖には水位差が18mあり、ネシ湖からピュハ湖に注ぐタンメルコスキ川という水路により水力発電が行われ、製紙、繊維工業などが発展していた。現在は、川の両側にフィンレイソン、タンペラなどのレンガ造りの工場跡が残っている。ノキアは製紙会社としてこのタンペレで設立され、また、ムーミン谷博物館もある。

疎水の支流は、南禅寺境内の水路閣というレンガづくりの連続アーチの水道橋の上を流れた後、「哲学の道」にそって北上し、銀閣寺のほうへと抜けてゆく。白川通今出川交差点近くで疎水支流が白川の下をくぐる不思議な光景が見られる。琵琶湖疏水開発の最大の目的は、水力を水車というかたちで動力源に用いるための運河（パワー・カナル）であった。疎水支流は白川に落とされることによって水車動力源となり、工場を稼働させるはずであった。

しかし、それは実現せず、疎水の本流のほうを送水管を通して流れ落ち、蹴上の発電所（現関西電力蹴上発電所）を稼働させている。日本初の一般供給用の水力発電所であり、

その後の水主火従の時代の嚆矢となった。

それぞれのエネルギーの「本店（1号店）巡礼」もおもしろいかもしれない。世界遺産登録に向けて日本の推薦枠一つを争っている「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の構成資産である端島炭坑（軍艦島）に上陸するのもよい。住宅から石油が噴出した新潟市秋葉区には、日本の地質百選にも選定されている新津油田の煮坪があり、他にも、日本最古の原油採取地の油坪（新潟県胎内市シンクルトン記念公園）や旧日本石油発祥の地の一つである尼瀬油田の機械掘第 1 号井跡（新潟県出雲崎町石油産業発祥地記念公園）がある。

お問い合わせ : [report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)